マナビエ
MANABIE

記述の設計図　第1部 土台

U01　記述は「材料の組み立て」

アドバンス

対象：高校2年・偏差値50

1. 要点（ルール）
2. 例題　評論「自分さがしの行き止まり」
3. 練習1・練習2（解答らんつき）
4. 解答と採点表

要点　記述の土台のルール

R01-1　記述＝6工程の組み立て

①読解（根拠の発見）→ ②設問分析 → ③材料の収集 → ④文の構成 → ⑤型への当てはめ → ⑥見直し。記述力とは、文才ではなく、根拠を集めて組み立てる手順の精度である。

R01-2　本文主義

解答の根拠は本文にある。自分の意見・一般常識・本文から一歩先の推測は入れない。本文に書かれていても、筆者が否定している考え（「～ではない」「～と考えがちだ」）は根拠にならない。

R01-3　最後まで読む＝読みを更新する

評論の前半の理解は、後半で書きかえられることが多い（傾向）。とくに「～ではない」「だが」「そもそも」のあとで、前半の見方が否定・修正される。――線部の答えは、本文全体を読んでから決める。

R01-4　対話と予測

「なぜそう言えるのか」と問いを投げかけ、逆接で先を予測しながら読む。予測が外れた所こそ、筆者の主張が出る所。ただし問いと予測は本文に答えさせるためのもので、本文を作りかえてはならない。

R01-5　本文の言葉が原則／言いかえは3つ

原則は本文の言葉。自分の言葉に言いかえるのは、①比喩（擬態語・くだけた表現もふくむ）②指示語 ③具体例（抽象化する）のときだけ。それ以外を言いかえると、本文の意味からずれる危険が増える。

R01-6　短く分けて、つなぐ

根拠を短い命題に分けて書き出し（段落番号つき）、論理の順（前提→展開→結論）に並べてから1文にする。百字を一気に書かない。

R01-7　採点は要素ごと

中心の要素4点・それを支える要素3点・前提や対比2点・形1点が目安。根拠のない要素・本文と矛盾する要素は点にならず、字数超過は採点対象外になることが多い。

ルールの番号（R01-〇）は、講座全体の通し番号です。動画・Webページ・このPDFで同じ番号を使っています。

例題　評論「自分さがしの行き止まり」

① 「本当の自分を見つけたい」と、多くの人が口にする。いまの自分はどこか借り物のようで、本当の自分は別のところにいるのではないか。そう感じた人は、ひとりで旅に出たり、これまでの人間関係から離れてみたりする。自分さがしと呼ばれるふるまいである。

② だが、自分さがしは、たいてい途中で行きづまる。旅先でどれほど自分の内側を見つめても、そこに「これが本当の自分だ」と言える何かが、はっきりと見つかることはまずない。

③ それは、探し方が足りないからではない。そもそも、探す場所がちがっているのではないか。自分というものが、心の奥に完成した形でしまいこまれていて、掘り出されるのを待っている。自分さがしは、暗にそう考えている。

④ ためしに、自分がどんな人間かを言葉にしてみるとよい。「人の話を聞くのが得意だ」「頼まれるといやと言えない」。こうした言葉はどれも、だれかとのかかわりを抜きにしては意味をもたない。聞く相手がいなければ聞き上手もなく、頼む人がいなければ断れなさもない。

⑤ 自分とは、他者から呼びかけられ、それに応えることをくり返すなかで、少しずつ形をとっていくものなのである。私は、ある人の前では冗談を言い、別の人の前では黙りこむ。そのどれもが私であり、どれか一つだけが本物というわけではない。

⑥ だとすれば、人間関係から離れて自分の内側だけを見つめることは、自分が形をとる場所そのものから離れることになる。探しものは、探しに出かけた先ではなく、置いてきた日々のやりとりのなかにあったのである。

⑦ 本当の自分を見つけたいと思うなら、まず、目の前の人とのかかわりのなかで、自分がどう応えているかに耳をすますことだ。自分とは、ひとりで見つけるものではなく、他者とともにつくられつづけるものなのだから。

問　――線部「自分さがしは、たいてい途中で行きづまる」とあるが、それはなぜか。本文全体をふまえて百字以内で説明せよ。

解き方

1. **工程①　最後まで読む＝読みを更新する**
   ②段落の――線部で「なぜ？」と問いを立て、「探し方が足りないから？」と予測して読む。③段落「それは、探し方が足りないからではない」で予測が否定される＝ここから筆者の主張（R01-3・R01-4）。答えの中心は⑤⑥段落、――線部の三段落後ろにある。
2. **工程②　設問分析**
   「なぜか」＝理由。「本文全体をふまえて」＝②だけでなく③～⑥の論理を使う。百字以内。

3. **工程③　根拠を短い命題に分ける**
   ③:自分さがしは、自分が心の奥に完成した形でしまわれていると考えている(前提)。／⑤:自分は、他者からの呼びかけに応えるなかで形をとる。／⑥:人間関係から離れて内側だけを見ると、自分が形をとる場所から離れる。

4. **工程④　本文主義で吟味**
   ④段落「聞き上手」「断れなさ」は具体例＝抽象化して⑤に吸収する(R01-5)。「本当の自分など存在しないから」は言い過ぎ(筆者は⑤で「そのどれもが私」と言っている)。本文と矛盾するので入れない。

5. **工程⑤　組み立てる**
   前提の否定(③)→ 筆者の考え(⑤)→ だから内側だけを見ると形をとる場所から離れる(⑥)→「～から。」

6. **工程⑥　見直す**
   主語(自分は／自分さがしは)がねじれていないか。具体例が残っていないか。百字以内か。

要素表(材料を集める)

要素	中身	根拠	入れる？
中心(直接の理由)	人間関係から離れて内側だけを見ると、自分が形をとる場所から離れてしまう	⑥	◎ 入れる
筆者の考え	自分は、他者からの呼びかけに応えるなかで形をとっていく	⑤	◎ 入れる
否定される前提	自分は心の奥に完成した形でしまわれているのではない	③	○ 入れる
具体例	聞き上手・断れなさ／冗談を言う・黙りこむ	④⑤	× そのまま書かない
本文と矛盾	探し方が足りない(③で否定)／本当の自分など存在しない(言い過ぎ)	③⑤	× 入れない

模範解答

模範解答(百字以内)　95字／100字以内

自分は心の奥に完成した形で隠れているのではなく、他者の呼びかけに応えるなかで形をとるものなのに、自分さがしは人間関係から離れて内側だけを見つめるので、自分が形をとる場所から離れてしまうから。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
中心:人間関係から離れて内側だけを見ると、自分が形をとる場所から離れる	4点
筆者の考え:自分は、他者からの呼びかけに応えるなかで形をとる	3点
前提の否定:自分は心の奥に完成した形でしまわれているのではない	2点
文末が「〜から。」・具体例を書いていない・主述がねじれていない	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
「探し方が足りないから。」	③段落で筆者がはっきり否定している。②段落で読むのをやめると、この答えになる。0点。
「本当の自分など、どこにも存在しないから。」	本文と矛盾(筆者は「そのどれもが私」と言う)。0点。
「聞き上手も断れなさも、相手がいなければ意味をもたないから。」	具体例のまま。抽象化されていないので、⑤の要素として3点中1点。
⑤だけで⑥が無い	自分の考え方は言えているが、なぜ「行きづまる」のかにつながっていない。中心の4点が入らない。
百一字以上	字数超過。採点対象外になることが多い。

練習1　評論「触れることのふしぎ」

① 見ることと触れることは、どちらも世界を知るためのはたらきである。だが、この二つのあいだには、見過ごされやすい大きなちがいがある。

② 見るとき、私は相手から離れたところに立っている。遠くの山をながめても、山は私に見られていることを知らない。見る者と見られるものとのあいだには、いつも距離がある。見ることは、相手に知られずに、一方的に相手を知ることができるはたらきなのである。

③ ところが、触れるときには、そうはいかない。手のひらで机に触れると、私は机のかたさを感じると同時に、自分の手のひらがそこにあることも感じている。触れる手は、触れたその場所で、触れ返されているのである。

④ 相手が人であれば、このことはいっそうはっきりする。泣いている子の背中に手を当てるとき、手は背中のふるえを感じ取る。同時に、子のほうも、その手のあたたかさや、ためらいを感じ取っている。手を当てた者は、相手の状態を知るだけでなく、自分の状態をも相手に知られてしまう。触れることは、同時に触れられることでもあるのだ。

⑤ 看病や介護の場で、手が言葉以上のものを伝えることがあるのは、このためだろう。「だいじょうぶ」と口で言いながら手がこわばっていれば、相手はそのこわばりのほうを受け取る。触れる手は、うそをつきにくい。

⑥ 見ることが、相手から離れて一方的に知るはたらきだとすれば、触れることは、相手との距離をなくし、たがいに知り、知られる関係に入ることである。触れるとは、相手を知るために、自分をさらすことでもあるのだ。私たちが、見知らぬ人をながめることはできても、その人に触れることはためらうのも、触れることが、こちらの内側まで相手に開いてしまうことを、どこかで知っているからではないだろうか。

問　――線部「触れることは、同時に触れられることでもある」とあるが、どういうことか。具体例を用いずに九十字以内で説明せよ。

① 要素表を書こう

材料(短く書き出す)	中身	根拠の段落

② 答えを書こう

									10										20
									30										40
									50										60
									70										80
									90										

90字以内(1マスに1字。句読点も1字)

練習2　評論(要約)「問いかけながら読む」

① 文章を読むとき、私たちは、書かれた言葉を順番に頭の中へ運びこんでいると考えがちだ。読むことは、書き手の考えを受けとる作業だというわけである。

② けれども、そのような受け身の読み方では、文字は目の前を通り過ぎていくだけで、意外なほど何も残らない。ページをめくる手は動いていても、心は文章の外に置き去りにされているのである。最後のページを閉じたとたん、何が書いてあったのか言えなくなる。だれにでも覚えがあるだろう。

③ ほんとうに読むとは、書き手に向かって問いを投げかけることである。「それはどういう意味か」「なぜそう言えるのか」。問いを持って読む者にとって、次の一文は、自分の問いへの答えの候補として現れる。

④ さらに、読み手は先を予測する。「しかし」とあれば、ここまでの話がひっくり返されるのではないかと身がまえる。予測は、しばしば外れる。だが、外れたときこそ、読み手は自分がどこで思いちがいをしていたのかに気づく。予測が裏切られることによって、読みは深まるのである。

⑤ 大切なのは、問いや予測が、書かれていることを勝手に作りかえるためのものではない、という点だ。読み手の問いは、本文によって答えられ、ときには退けられる。そのたびに読み手は、自分の考えを本文に合わせて組みなおす。問いが本文に退けられることは、読みの失敗ではない。それは、読み手が自分の思いこみの外へ一歩出たしるしなのである。問いかけながら読むとは、自分の考えを書き手の言葉にぶつけ、ためしつづけることなのだ。

⑥ 読むことは、書き手と読み手とのあいだで交わされる、声にならない対話なのである。読み終えたあとに残るのは、書かれた内容の記憶だけではない。その対話を通して、読み手は、読む前の自分とは少しちがう場所に立つことになる。

問　――線部「読むことは、書き手と読み手とのあいだで交わされる、声にならない対話なのである」とあるが、筆者の考える「読む」とはどのようなことか。本文全体をふまえて百二十字以内で要約せよ。

① 要素表を書こう

材料(短く書き出す)	中身	根拠の段落

② 答えを書こう

10 20
30 40
50 60
70 80
90 100
110 120

120字以内(1マスに1字。句読点も1字)

解答と採点表

練習1　評論「触れることのふしぎ」

解き方

1. **工程①　最後まで読む**
   ③④段落で――線部の中身、⑥段落で「見ること」との対比による結論が出る。⑤段落は――線部から導かれる応用（看病・介護）。

2. **工程②　設問分析**
   「どういうことか」＝言いかえ。「具体例を用いずに」＝机・背中・看病の話は抽象化する（R01-5の③）。九十字以内。文末「～ということ。」

3. **工程③　根拠を短い命題に分ける**
   ③：触れる者は、触れたその場所で触れ返されている。／④：相手の状態を知ると同時に、自分の状態も相手に知られる。／⑥：見ること（離れて一方的に知る）と対比して、触れることは距離をなくし、たがいに知り知られる関係に入ること。

4. **工程④　本文主義で吟味**
   「触れるとやさしい気持ちが伝わる」は本文にない。⑤の「手はうそをつきにくい」は応用で、――線部の意味そのものではない。

5. **工程⑤⑥　組み立てて見直す**
   （相手との距離がない）→ 相手を知ると同時に自分も知られる → 一方的に知るのではなく、たがいに知り知られる関係に入る →「ということ。」具体例の語（手・背中・机）が残っていないか確かめる。

要素表

要素	中身	根拠	入れる？
中心	触れる者は、相手の状態を感じ取ると同時に、自分の状態も相手に感じ取られる	③④	◎ 入れる
対比による結論	一方的に知るのではなく、たがいに知り知られる関係に入る	②⑥	◎ 入れる
支える条件	相手との距離がない（触れたその場所で）	③⑥	○ 入れる
具体例・応用	机・泣いている子の背中・看病や介護	③④⑤	× そのまま書かない

模範解答

模範解答（九十字以内）　81字／90字以内

触れる者は相手との距離をなくし、相手の状態を感じ取ると同時に自分の状態も相手に感じ取られるので、一方的に知るのではなく、たがいに知り知られる関係に入るということ。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
中心:相手を感じ取ると同時に、自分の状態も相手に感じ取られる	4点
対比:一方的に知る(見る)のではなく、たがいに知り知られる関係に入る	3点
条件:相手との距離がない	2点
具体例を用いていない・文末が「〜ということ。」	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
「背中に手を当てると、子のほうも手のあたたかさを感じるということ。」	具体例のまま。設問の条件(具体例を用いずに)にも反する。0〜1点。
「手は言葉以上のものを伝えるということ。」	⑤段落の応用で、——線部の意味ではない。0点。
「触れるとやさしさが伝わるということ。」	本文に根拠が無い。0点。

練習2　評論(要約)「問いかけながら読む」

解き方

1. **工程①　最後まで読む**
   ①段落「〜と考えがちだ」は、筆者が否定するための一般論。②で否定し、③④⑤で筆者の考え、⑥でまとめ(——線部)。①だけを材料にすると逆になる(R01-2・R01-3)。

2. **工程②　設問分析**
   要約＝本文全体の論理を短くまとめる。「読む」とはどのようなことか、に正面から答える。百二十字以内。

3. **工程③　根拠を短い命題に分ける**
   ①②:受け身で受けとる読み方では何も残らない(否定される考え)。／③:書き手に問いを投げかける。／④:先を予測し、予測が裏切られることで読みが深まる。／⑤:問いや予測が本文に答えられ退けられるたびに、自分の考えを組みなおす。／⑥:書き手との対話で、読み手は変わる。

4. **工程④　抽象化**
   「それはどういう意味か」などの問いの例、「しかし」の例はそのまま書かない(R01-5)。

5. **工程⑤⑥　組み立てて見直す**
   否定(受け身ではない)→ 問いと予測 → 本文に合わせて組みなおす → 対話で読み手が変わる。⑤の「本文を勝手に作りかえない」を落とさない。

要素表

要素	中身	根拠	入れる？
中心	問いを投げかけ先を予測し、本文に答えられ退けられるたびに自分の考えを組みなおす	③④⑤	◎ 入れる
まとめ	書き手との声にならない対話であり、読み手を変えていく	⑥	◎ 入れる
否定される考え	書き手の考えを受け身で受けとる作業ではない	①②	○ 入れる
具体例	「なぜそう言えるのか」という問い／「しかし」で身がまえる	③④	× そのまま書かない

模範解答

模範解答（百二十字以内） 116字／120字以内

読むとは、書き手の考えを受け身で受けとることではなく、書き手に問いを投げかけ、先を予測しながら、本文に答えられたり退けられたりするたびに自分の考えを組みなおしていく、書き手との対話であり、それによって読み手が変わっていくことである。

採点表

採点表（要素ごとの配点）	点
中心：問いと予測を本文にぶつけ、そのたびに自分の考えを本文に合わせて組みなおす	4点
まとめ：書き手との対話であり、それによって読み手が変わる	3点
否定：受け身で受けとることではない	2点
具体例を書いていない・「読むとは～ことである」と問いに正対している	1点
合計	**10点**

減点の型（こう書くと）	何点になる？ なぜ？
「読むとは、書き手の考えを受けとる作業である。」	①段落の、筆者が否定する一般論。本文と逆。0点。
「『しかし』とあれば、話がひっくり返されると身がまえて読むこと。」	具体例のまま。要約になっていない。10点中1点。
「自分の問いに合うように本文を読みかえること。」	⑤段落と矛盾（本文を勝手に作りかえない）。0点。

マナビエ
MANABIE

記述の設計図　U01 材料の組み立て（アドバンス）

© MANABIE　無断転載・複製・改変・再配布を禁じます